QOL

Quality Of Life

QOL サポーター 新潟

48

2018年12月4日発行
新潟医療福祉大学広報委員会編集

9月3日（月）～9月7日（金）、連携教育の一環として「連携総合ゼミ」が開催され、
学科、大学、さらには国の垣根を越えて、チーム医療・ケアについて実践的に学びました。

Index

■ 特集「教職支援センター設置による教職支援体制の変化とは？」
■ 「連携総合ゼミ」開催報告
■ 学外実習体験記
■ 「新潟医療福祉学会学術集会」開催報告
■ 活躍する卒業生の職場レポート
■ CAMPUS NEWS
■ 「私立大学研究ブランディング事業」報告
■ 伍桃祭を終えて
■ 高校生の皆さんへ

新潟医療福祉大学

特集 教職支援センターの取り組み

教職支援センター設置による 教職支援体制の変化とは？

2016年4月に本学の教職課程の学生を支援するための組織として設置された教職支援センター。設置されるまでも教職支援は行われていたが、センター設置により支援体制に大きな変化が生まれた。今回は、センター長に教職支援センター設置による支援体制の変化、そして今後の展望などについて伺った。

本学で目指せる教員免許一覧

健康スポーツ学科	中学校・高校教諭一種免許（保健体育）※1 小学校教諭二種免許 ※2
健康栄養学科	栄養教諭一種免許 ※1
看護学科	養護教諭一種免許 ※1

※1　教職課程再課程認定申請中
※2　玉川大学通信教育部との併修により取得可能（受講要件あり）

センター長
吉田 重和
健康スポーツ学科
准教授

教職支援センターとは？

教職支援センターは、教職を目指す学生・卒業生の皆さんを全面的に支援するための組織です。学生・卒業生の皆さんへの具体的な支援内容としては、1）経験豊富な教員が応対する「学修相談」の実施、2）高い専門性の教員が指導する「学内講座」の開講、3）教師としての資質を伸ばす「模試・イベント」の展開、4）最新の機材を備えた「模擬授業スペース・自習スペース」の提供、の4点を挙げることができます。学生・卒業生の皆さんには、これらの支援を上手く活用していただき、教職への意欲を高め、教職に必要な知識技能を身につけていただきたいと考えています。

最大の強みは「めんどうみの良さ」

教職支援センターは、施設・設備などのハード面も充実していますが、最大の強みは“人材”というソフト面にあると考えています。教職支援センターの活動は、教職を目指す学生・卒業生の夢や想いを、非常勤講師も含めた教職課程担当教員・職員が全力で受け止めるところから始まります。そして、一人ひとりの夢や想いを大切にしながら、個々の現状に即した具体的な指導・支援が展開されていきます。まさに「めんどうみの良い」教職指導を展開しているわけですが、この「めんどうみの良さ」こそが、教職支援センターの大きな特徴だと自負しています。

“手探り”での支援だったこれまで

教職支援センターが設置される前から教職を目指す学生・卒業生は多く在籍しており、その想いに応えようとする一部の教員により、継続的な支援が行われていました。ただ、これらの支援をバックアップする具体的な組織や場所は存在しませんでしたし、教職に対しては学科や教員ごとに様々な考え方がありましたので、支援が効果的に機能しているとはいえない状況でした。

また、教員採用試験対策という観点では、専門外の教員が手探りで支援するという場面が多々発生していましたので、内容面でも足りないところが多かったかと思います。

実際に教職支援センターを利用した卒業生から、「私が在学しているときから教職支援センターがあれば良かったのにな…」という声を聞いたときは、当時の支援の不十分さを感じ、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。そのような経験から、卒業生の皆さんにも、様々な支援が展開されている教職支援センターをぜひ積極的に利用していただきたいと考えています。

センター設置による大きな変化

教職支援センターが設置されたことにより、教職を専門的に扱う具体的な組織や場所が生まれ、教職に対する考え方も、学科や教員の枠を越えて徐々に定まりつつあるように思います。その結果、教職に関する支援の質および量が劇的に向上したと感じています。現在は、かつてのような「専門外の教員が手探りで何とか行う」支援はほぼなくなり、各教員がそれぞれの実務経験や専門性に応じた指導を、適正な規模と頻度で行っています。かつての支援状況を知る卒業生から上記のような声が寄せられていることが、支援の内容が向上したことを良く表していると思います。また学生の中には毎日足繁くセンターに通う学生もいて、教職を目指す学生にとって、教職支援センターが居場所となっている様子が窺えます。教職を目指す学生にとって居場所ができたことも、センターが設置されたことによるポジティブな変化だと言えるのではないでしょうか。

教職支援センターでは教職担当教員による個別相談も行っています。毎月指定の曜日に在室する教員へ、教職に関することなら何でもお気軽にご相談ください。

小・中・高の教室をイメージした模擬教室で、教育実習や教員採用試験前の模擬授業の練習をすることが可能です。自分が教壇に立つ姿を録画して、後から確認するハイテク機能も装備しています。

毎月指定の時限に教職担当教員による学内講座が行われています。教養講座の他、論作文講座・模擬授業講座・集団討論や集団面接など多岐に渡って講座を展開しています。

本学学生に求める教育者像

本学では、「優れたQOLサポーターとしての教師」の育成を教員養成理念として掲げています。この理念は、

1）児童生徒の人格形成に関する豊かな教養や人間性
2）児童生徒・保護者・地域住民の気持ちに寄り添う豊かな感性
3）専門領域に精通した高度な知識・技能
4）社会の中で自己の可能性を実現する力
5）学校教育の場で求められるチームワークを発揮する力
6）やる気を引き出すコミュニケーション能力
7）教職に対する使命感と最後まで責任を持って職務を遂行できる問題解決力

の7つの指針によって方向づけられるものです。本学出身の教育者には、「優れたQOLサポーターとしての教師」として、自らの専門領域における高度な知識・技能と深い教育学的教養を備え、児童生徒の「現在のQOL」に目を向けて適切に対応できるだけでなく、彼らの「将来のQOL」の向上をも見据えながら、周囲の人々と連携して職務を遂行していくことのできる存在になって欲しいと願っています。

今後の支援で力を入れたい3つのこと

教職支援センターで今後力を入れていきたいことは3点あります。

1点目は、支援の質を更に向上させていくことです。2018年度より指導体制を一部改め、経験豊かな実務家教員2名をセンター非常勤講師として迎えています。講師の指導に対し「大変効果的だった」という声が多数届いていることから、今後とも同様の指導体制を継続しつつ、更なる質の向上に取り組んでいきます。

2点目は、卒業生に対する支援を拡充することです。現役の学生だけでなく、教職を目指す卒業生や、教職に就いた卒業生に対しても積極的に支援をしていきたいと考えています。具体的には、教員採用試験対策学内講座や各種研修に一人でも多くの卒業生が参加できるよう、講座や研修の実施の在り方を柔軟に検討していきます。

3点目は、本学全体の特徴でもある「連携教育」を、教職としても積極的に展開していくことです。2017年度より、4年次の授業科目「教職実践演習」において、教職課程のある3学科（健康栄養学科・健康スポーツ学科・看護学科）合同の連携教育が実施されています。現在は一部の学生のみを対象に実施していますが、「優れたQOLサポーターとしての教師」になるための学びが多く盛り込まれている取り組みですので、より多くの学生が参加できるよう、今後実施体制などを検討していきたいと考えています。

速報！ 2018年度教員採用試験結果

現役生6名、既卒生12名の計18名が合格！

現役合格 栄養教諭1名　小学校教諭5名

既卒合格 栄養教諭3名　養護教諭1名　小学校教諭3名
中・高保健体育教諭5名

今年度本学学生および卒業生から18名が新たに教員採用試験に合格しました。教職支援センターでは、在学生のみならず、希望する卒業生に対する教員採用試験対策指導も実施しており、今年も多くの在学生・卒業生が教職支援センターを利用して指導を受けています。

教職支援センターからのMESSAGE

＼ 卒業生もお待ちしています！ ／

教職支援センターでは、学内での教員採用試験対策講座やイベントを各種継続的に実施しています。学校現場での経験を持つ実務家教員による論作文講座、模擬授業講座に加え、論作文・面接・集団討論などで説得力をもたせるための根拠となる「考え方を正しく理解する」ための講座も展開しています。その他、筆記試験対策・実技試験対策に対応した勉強会の実施や、外部業者による講座の実施により教職教養や一般教養について学ぶ機会も設けています。教員採用試験全国公開模擬試験を学内で実施しており、自らの成績をチェックすることも可能です。

教職支援センターでは、経験豊富な教職担当教員があなたをお待ちしています。出願書類作成から教員採用試験合格まで、教職に関する全面サポートを行う教職支援センターを是非お気軽にご利用ください。

新潟医療福祉大学大学院 Twitterアカウント
@NUHW_kyoshoku

教職支援センターブログ
http://nuhw.blog-niigata.net/kyoshoku/

2018年度

「連携総合ゼミ」開催報告

開催期間

2018年9月3日(月)～7日(金)

連携総合ゼミで「チーム医療・ケア」を実践的に学ぶ

連携総合ゼミとは

「連携総合ゼミ」とは、本学の特徴的な取り組みの一つである「連携教育」の一環として、4年次前期に開講されるゼミで、これまで学内外で修得した専門知識・技術を総動員し、「チーム医療」を実践的に学んでいきます。

ゼミでは、具体的な症例をもとに、関連する学科が混成チームを形成。グループワークを通じて対象者のQOL向上に向けた支援策を意見交換し、検討結果を発表します。

本年度の「連携総合ゼミ」では、新潟薬科大学、日本歯科大学新潟短期大学、新潟リハビリテーション大学と、本学が学術提携を結んでいるフィリピンのアンヘレス大学、サント・トマス大学、台湾の国立陽明大学、中山医学大学の学生もチームの一員として加わり、国際的な視野が広がるなど、さらに「チーム医療」の学びの幅が広がりました。

▶連携総合ゼミの流れ

01 担当する専門職を理解

症例に対する支援策について、参考書などを用いながら自己学習を行い、自身が目指す専門職の役割などについて理解・知識を深めます。

02 他の専門職を理解

自己学習の成果をグループ内で発表し、各専門職の役割や専門用語などの情報を共有することで、他の専門職への理解を深めます。

03 各専門職の支援策を共有

各専門職の立場から意見や支援策を出し合い、グループ内で支援策の内容を共有することで、他の専門職との連携について理解を深めます。

04 協働して支援プランを作成

グループ内で共有した支援策をもとに、各専門職の立場から意見交換し、対象者に対して最善となる具体的な支援プランを作成します。

05 グループ発表

これまでの研究成果をグループ内で各自分担して、発表会に向けた資料作成を行います。発表会ではパワーポイントを使用して代表者が発表します。

2018年度 連携総合ゼミ事例一覧

- ○脳性まひ(疑い)児と育児不安をもつ母への成長・発達支援
- ○女子高校生競技者の食行動異常、無月経、骨粗鬆症
- ○中高年者のメタボリックシンドロームの改善
- ○わたしも町のような人になりたい(精神科領域)
- ○大阪市における小学生虐待死事例の検証(報道事例)
- ○切迫早産・妊娠高血圧症候群で入院が必要になった妊婦への援助
- ○開発途上国における障害のある人たちのための地域に根ざしたリハビリテーション(海外大学参加事例)
- ○高齢者糖尿病合併症の支援策
- ○重度四肢まひ者の家庭復帰計画
- ○高齢者の骨折予防・治療と生活支援
- ○高齢者への投薬(新潟薬科大学提供事例)
- ○アスリートへの栄養・投薬サポートとドーピング対策(新潟薬科大学提供事例)
- ○聴覚障害のある幼児を持つフィリピン人の母親への支援(海外大学参加事例)
- ○家族と一緒に暮らしていたい:認知症患者の在宅支援(日本歯科大学新潟短期大学提供事例)
- ○チーム間での情報に着目した再発心原性脳塞栓症

Report.1

聴覚障害のある幼児を持つフィリピン人の母親への支援

理学療法学科　教授　久保 雅義

▶連携への挑戦

私がファシリテーターとして参加したゼミは、二重の意味での「グローバル化」のうねりの中にありました。参加メンバーは、本学学生5名に加えて、台湾の国立陽明大学の5名とフィリピンのサント･トマス大学の6名を含む、総勢16名の大所帯です。また、検討ケースも「日本に住んでいるが、孤立した環境で聴覚障害児を育てている、あまり日本語の得意でないフィリピン人の母親への支援」という難しいものでした。メンバーもグローバル、検討事例もグローバルです。私は特に「共通言語」を使うことの大事さを強烈に感じさせられました。まずは、英語ですね。今回のチームでは英語を使うことが必須です。日常的に英語を使っているフィリピン組と、専門教育では英語の教科書を使っている台湾組に対して英語を使ってコミュニケーションをとっていくことは、本学の学生にとっては大変なチャレンジです。微妙なニュアンスまで伝えることが難しいからこそ、ハッキリと意見を述べることが大切でした。さらに、それぞれの専門職分野だけで使われている「専門用語」は、このグローバルチームでは共通語にはなり得ません。各専門職者は自分たちの専門用語を、メンバー全員にわかる共通語でハッキリと理解させる能力が要求されていました。今回のゼミでは土台となる「共通語」でコミュニケーションを成立させるだけでも大変な上り坂の連続でした。それだけに最後までやり終えた感慨もひとしおだったに違いありません。「母親を助けたい」という目的を共有してチャレンジングなケースに挑戦し続けたゼミメンバーには大きな敬意を表します。

[参加学生からのコメント]

初めは言葉も文化も違う学生たちと同じ目標に向けて考えることは難しかったですが、英語でコミュニケーションをとる中で、お互いに理解し合えたときはとても嬉しかったです。価値観の異なる視点から物事を考える良い経験となり、有意義な時間を過ごすことができました。

（理学療法学科4年　小黒 有莉子）

Report.2

チーム間での情報に着目した再発心原性脳塞栓症

医療情報管理学科　教授　柴山 純一

▶学生たちの持つ力を実感

この事例は、心原性脳塞栓症の再発症例をもとに「情報」というキーワードで、患者様と医療職者、多職種間の連携を図ることを狙いとしたものです。

やや繁雑なケースでしたが、意識的に多くの情報を絡めてテーマ事例を作成しました。連携総合ゼミの開始時には「ちょっと情報量が多すぎて、まとめきれないかな?」と思っていましたが、学生たちは、ものの見事に内容を整理しました。一つ目は「情報共有不足で発生したトラブルにより、病院と患者様との関係性が悪化」、二つ目は「情報の視点で職種･部門間にまたがる現在までの状況を分析し、今後の状態に応じた回復期移行と在宅復帰を目指す場合のケアプラン」としてまとめ上げてくれました。

私は初めてファシリテーターとして参加しましたが、協力していただいた先生方のおかげもあり、楽しく充実したゼミとなりました。学生たちの鋭い視点と、そこから展開するディスカッションには毎日驚きを感じつつ、一つのカタチに組み上げられていく様子には、今さらながらに学生の持つ力を強く感じた1週間となりました。チーム内の連携も抜群でしたが、2日目には、バーベキューを通してサント･トマス大学、国立陽明大学からの学生を含めた、他チームとの連携も図れたことも思い出です。

このゼミ活動は、卒業後、社会に出た時に間違いなく彼らの役に立つと再認識したものとなりました。

[参加学生からのコメント]

このゼミを通して各専門職が情報を共有し話し合うことで、質の高い医療を提供することが可能であると実感できました。また、他職種からの情報は広い視野を持って物事を考える力を与えてくれました。さらに、同じ志を持った他学科の仲間を得ることもでき、貴重な経験となりました。

（理学療法学科4年　渡邉 拓）

学外実習体験記

本学では、今年度11学科で学外実習を行いました。各専門職として高い実践力を身につけることを目標とした学外実習の成果を報告します。

患者様との会話を大切に

理学療法学科 4年
荒尾 実束

私は、秋田県の整形外科病院で臨床実習をさせていただきました。実習では、主に怪我をした中高生や整形疾患を患った地域の方々に対してリハビリを行う機会が多くありました。

外来のリハビリテーションでは、短い時間の中で必要な評価や治療を行い、即時的な効果を求められました。限られた時間の中でリハビリの効果を出すことに苦労しましたが、患者様と関わる時間が短いからこそ、患者様との会話を大切にし、患者様を一番に考えることを重要視して実習に取り組みました。苦労も多くありましたが、患者様のニーズに応え喜ぶ姿を見ることができた時は、非常にやりがいを感じました。

今回の実習で出会った患者様や指導者の方々への感謝の気持ちを忘れず、実習を通して学んだことや、経験したことを今後の勉学に活かしていきたいと思います。

臨床実習で学んだこと

作業療法学科 4年
渡辺 敦也

私は、埼玉県にある埼玉医科大学病院にて8週間の実習をさせていただきました。実習中は、様々な疾患や障害を持つ患者様のリハビリを見学したり、担当した患者様の自宅復帰や趣味活動の再開を支援させていただきました。実習を通して、自身の知識や技術の不足を痛感した一方で、患者様の自宅復帰や趣味活動の再開を支援する作業療法士という職業に、改めてやりがいを感じることができました。

特に印象に残った出来事は、担当した患者様の趣味がギター演奏で、演奏を再開するための支援を行ったことです。身体の回復だけでなく演奏を行う環境や方法を工夫することで、退院後にギター演奏を再開することができました。このように身体の回復だけに目を向けるのではなく、患者様を取り巻く環境も含めて幅広い視点を持ち、介入することが非常に重要であると感じました。今回の総合実習で得た経験を活かして、今後の勉強に励んでいきたいと思います。

信頼される言語聴覚士を目指して

言語聴覚学科 4年
石川 真央奈

私は慶応義塾大学病院で2ヵ月間、実習をさせていただきました。実習を通して、症状だけでなく患者様の背景にも注目することが大切だと理解しました。信頼関係形成のための一つとして「ユマニチュードの技法」を学びました。その技法を実践している言語聴覚士には、誰にも話せない悩みを打ち明ける患者様が多くいらっしゃったことが印象的でした。一般常識として大切とされていることでも、実際には長く時間をかけて実践できないこともあると思います。しかし、当たり前のことを当たり前に行うことを大切にしている姿勢に感銘を受けました。また、発話意欲を引き出すために、患者様の興味関心の対象を理解し共有することが大切だと感じました。そのために本を多く読むことをはじめ、見聞を広めることが大切だと再認識することができました。今回の実習では評価や訓練の技法だけではなく、言語聴覚士としての心構えも多く学ばせていただきました。将来は患者様に信頼される言語聴覚士を目指します。

学外実習で得られたこと

義肢装具
自立支援学科 4年
西澤 梓

義肢装具自立支援学科では、福祉用具分野と義肢装具分野での実習を行います。今回、4年次では義肢装具分野での実習を行い、私は鹿児島県の義肢装具製作会社で6週間実習をさせていただき、実習中は主に義肢装具・座位保持・靴について学びました。

学外実習では、これまで学んできたことのほか、特異な症例や義肢装具を間近で見ることができたうえ、義肢装具士の臨床での役割や病院・施設のスタッフとの連携についても学ぶことができました。

実習中に義足の調整に来られた方に様々な手法で調整を行う姿が印象に残っており、義肢装具士の知識や技術、人間性が患者様の生活に影響を与えることを知ると同時に、専門職として責任を持たなくてはならないことを実感しました。

学外実習を通して自分の目指す義肢装具士像を明確にすることができました。今後は、実習で感じた思いを大切に、今まで以上に目標に向かって精進していきたいと思います。

チーム医療の一員として

臨床技術学科 4年
長井 穂菜美

私は2ヵ月間、新潟大学医歯学総合病院で臨床実習をさせていただきました。同じ病院内で、臨床検査分野と臨床工学分野の実習を経験できたことで、職種の違いと関わりを学ぶことができました。実際に、臨床工学分野の手術室での実習では、臨床検査技師が提供した検査結果をもとに、臨床工学技士が臨機応変に対応する姿を拝見し、ダブルライセンス取得の強みを実感することができました。

また、一人の患者様に対して、多職種が専門分野としての意見を提案し、患者様により良い医療を提供するチーム医療についても深く学ばせていただき、そのチーム医療の一員として働くことの強い責任と大きなやりがいを感じました。

この2ヵ月間、臨床現場でしか学べない貴重な経験をさせていただき、今後、医療従事者として働く上での基盤を作ることができたと思います。実習で学んだことを活かして、今後の勉強に励んでいきたいと思います。

臨床実習を終えて

視機能科学科 2年
藤巻 憲

私は金沢医科大学病院にて5日間、臨床実習をさせていただきました。実際の臨床現場で視能訓練士による指導の下、診療の流れや患者様への気遣いなどを学ばせていただきました。

臨床現場では学内の実習だけでは気づけないことが多くありました。特に検査説明においては、患者様に対してより分かりやすく端的に説明をしていました。学内の実習でも指導は受けていましたが、学生同士の実習ではお互いに検査内容を分かった上で実習しているため、どうしても些細な事に気づくことはできません。それに比べ、現場の視能訓練士は、患者様に「どのような検査なのか」を分かりやすく説明することはもちろんのこと、「どこを向いてほしいのか」、「どのように動いてほしいのか」、というように具体的に説明していました。

これからは3年生での学外実習に向けて、講義や実習で少しでも技能の質を高めたいと思いました。今回の臨床実習で学んだことを今後に活かしていきたいです。

臨床栄養学実習を終えて

健康栄養学科 3年
増村 百夏

9月6日から3週間、信楽園病院にて臨地実習をさせていただきました。実習では外来栄養指導や、昼食会、病棟訪問など、患者様と直接関わる中で、大学では体験することのできない貴重な経験をさせていただきました。実際に外来栄養指導を体験させていただいたとき、私は緊張してしまい患者様からうまく食生活などについて聞き出すことができませんでした。一方、指導していただいた管理栄養士の先生方は初めてお会いする患者様にも緊張せず、患者様が話しやすい雰囲気を作っていました。学生の時から色々な世代の方とコミュニケーションをとり、経験を積むことが必要だと学びました。

様々な体験をさせていただいた中で他職種との連携がとても重要であると改めて学ぶことができました。患者様の普段の様子や食事の摂取状況など、毎日管理栄養士が確認できないことも多いため、他職種の方との連携をうまく行うことで患者様に合ったサポートが行えると実習を通して感じました。

今回の実習で経験させていただいたことを糧に、今後の勉学に励んでいきたいと思います。

「ホウ・レン・ソウ」の大切さ

健康スポーツ学科 4年
田中 航平

私は母校である県内の県立高校にて3週間の教育実習をさせていただきました。教育実習では、まだ学生の身分でありながら一人の社会人として教壇に立ちました。授業や生徒との交流などは大学の授業で学んだことが活かせたのですが、「ホウ・レン・ソウ（報告・連絡・相談）」が上手くできませんでした。それは、学校行事の日に、一部の生徒が清掃時間の認識が誤っていたことに気付いたにも関わらず、私が担当教員に「報告」しなかったために、他の多くの生徒に誤った情報が伝わってしまったことです。また、授業計画を立てる際に指導教員への「相談」が不足していたために、授業直前で大幅な内容修正が必要になり、予定していた授業時間を超えてしまうこともありました。このような事態は、「ホウ・レン・ソウ」によって防げたのではないかと実感しています。今後は、教育実習で学んだ「ホウ・レン・ソウ」の大切さを心に刻み、立派な社会人になれるよう努力していきたいと思います。

臨地実習での学び

看護学科 2年
山口 真純

私は2週間の病院実習を通して、“患者様の個別性に合わせた看護”と“他職種との連携”の重要性を学ぶことができました。患者様の疾患の知識や電子カルテの情報からだけでなく会話や状態の観察から、今、患者様にとって最も必要なケアは何なのかを考えることが大切です。私が担当させていただいた方は、絵を描くことが趣味でしたが、右手の動きが思うようにいかず悔しい思いをされていました。そこで、気分転換も兼ねて、手も動かせるよう絵画の本を見ていただきました。患者様も笑顔になり、少し距離も縮まったように思えました。

また現場の看護師の皆さんは、作業療法士の嚥下訓練結果を踏まえて食事の形態を考えたり、理学療法士から訓練内容の情報を得て看護に活かしていました。私も常に広い視野をもって、他職種からの視点も積極的に取り入れ、看護に活かすことのできる看護師を目指そうと思います。

福祉事務所での実習を終えて

社会福祉学科 3年
倉田 果歩

私は社会福祉行政機関である福祉事務所で実習を行いました。実習では、福祉事務所の機能や地域にとっての役割、社会資源や関係機関との連携をはじめ、自分の住んでいる地域の問題についても学びました。特に印象に残っていることは、住民の生活課題の重複化が起こっていることです。今までは、高齢者福祉について関心が強かったのですが、実習を通して生活保護や児童福祉など幅広い専門知識が求められることに気づきました。

その気づきを踏まえ、新しい分野にチャレンジし視野を広げるため、10月に福井県で開催された全国障害者スポーツ大会の新潟市選手団役員として、5泊6日にわたって知的障害者のサポートをしました。障害のある人々がスポーツを通じて自立し、社会で活躍する姿に触れ、地域で共に生きる社会づくりを実現する意義を実感しました。この経験を大切にして、人々と共に活動するソーシャルワーカーを目指します。

病院実習を終えて

医療情報管理学科 3年
板垣 匠

私は夏休みの期間に1週間の病院実習を行い「診療情報管理士」の業務を体験させていただきました。今回の実習で「診療情報管理士」の業務を具体的にイメージすることができました。また、「ドクターズクラーク」の業務内容や講義で学んだ制度がどのように運用されているかなどの話を聞くことができました。

今回の実習を通じて私は自分自身の知識が足りていないということに気づきました。実際のカルテから必要な情報を探すのに専門用語が多く使われており、今の自分の知識ではまだまだだな、と実感しました。

今回の実習で感じたことを踏まえこれからも勉学に励み、病院で診療情報管理士として勤められるように頑張りたいです。

第18回 新潟医療福祉学会学術集会 開催報告

実行委員：視機能科学科
開催日：2018年10月27日（土）

新潟医療福祉学会は、健康・医療・福祉・スポーツに携わる研究者の研鑽の場として開学と同時に立ち上げられ、毎年秋に行われる学術集会は、幅広い分野の研究者が集う貴重な機会として、情報交換をしながら「チーム医療」を実感できる場となっています。

本年2018年度の学術集会は、10月27日（土）に開催されました。一般演題87題（口演6題、ポスター81題）、特別講演およびシンポジウムを含め、合計91演題の発表が行われ、学会総会および会頭賞・奨励賞の表彰式も行われました。

テーマ 「世界に輝く日本の科学力・技術力」

特別講演

多職種協働スタイルが生み出す人工知能とビッグデータの応用

講師：田淵 仁志（ツカザキ病院眼科 主任部長）

講師の田淵先生は、眼科医20数名を擁する国内最大規模の眼科病院で、人工知能とビッグデータの活用という、21世紀の産業革命にも匹敵する最新技術を医療に取り入れ、さらに多職種の専門性を活かした画期的なチーム協働スタイルを実践されています。講演では、その具体的な取り組みを紹介され、これからの医療は人工知能の助けなくして成り立たないと力説されました。

シンポジウム

テーマ：世界に輝く国際活動

3名のシンポジストによる発表と質疑応答

「空飛ぶ車椅子サークル ～車椅子と心を届ける活動～」

講師：前田 雄（新潟医療福祉大学 義肢装具自立支援学科 講師）

使われなくなった車椅子を回収・修理・整備して、アジア諸国へ贈る国際ボランティア活動として知られる「空飛ぶ車いすプロジェクト」についての紹介です。本学の学生もサークル活動で参加しており、海外で車椅子がどのように使用されているかを知り、在学中に実際の利用者に合わせた車椅子の選択や適合を学ぶ貴重な機会となっていることが報告されました。

「アフリカ海外医療支援の実情報告」

講師：石飛 直史
（ツカザキ病院眼科 視能訓練士）

アフリカ眼科医療を支援する会（AOSA）が2008年からモザンビークで行った僻地医療活動の報告です。具体的には、白内障で失明した1,000人余りに対する人工水晶体挿入手術の前後の検査、指導などを視能訓練士が担当し、現地の人々のQOL向上に大きな役割を果たしたことが報告されました。

「メキシコ大地震への国際緊急援助隊派遣 ～海保救命士として救助チームに参加～」

講師：渡邊 翼
（第九管区海上保安本部 新潟航空基地 機動救難士）

海上保安庁における諸外国との連携・協力業務の一環として国際緊急援助活動があり、2017年9月のメキシコ大地震では要請を受けて出動し、ビル倒壊現場での捜索、瓦礫の中からの救出、閉鎖空間での救急救命処置などを行った様子が詳細に報告されました。
発表に続く質疑応答では、それぞれの国際活動に対する熱い想いが語られ、後進の学生への大いなる刺激となりました。

ポスター展示

▶午前の一般口演では、6名の演者が研究成果を発表し、活発な意見交換が行われました。午後のポスター発表では学生食堂MOMOcaféの広々とした会場に81枚のポスターが立ち並び、各発表者の説明と質疑応答のやりとりが各所で見受けられました。ここには企業展示やリフレッシュコーナーも設置され、多くの学生でにぎわいました。

閉会式

▶閉会式では、会頭賞・奨励賞の表彰が行われ、学生、院生、若手教員の計6名に、山本会頭から賞状と副賞および山本会頭の著書が贈られました。

皆さまのご支援により、参加者総数は351名となり、盛況のうちに終了することができました。また、出展6社、広告掲載24社、寄付8社など、多大な協賛のご支援をいただきました。改めまして、ご参加ならびにご支援いただいた皆さまに感謝いたしますと共に、心より御礼を申し上げます。次回、第19回の学術集会は、2019年10月に開催される予定です。

第18回新潟医療福祉学会学術集会
実行委員長　金子 弘（視機能科学科）

活躍する卒業生の職場レポート

卒業生レポート FileNo 01

もう一度 好きだったことができるようにサポートしたい

中伊豆
リハビリテーションセンター
作業療法士
佐藤 有紀さん
福島県 双葉高校出身
作業療法学科
2017年3月卒業

▶ 現在の仕事内容を教えてください。

私は現在、作業療法士として病院に勤務しています。作業療法士とは病気やけがにより、食事やトイレ、家事などの生活動作や趣味・仕事が行えなくなった方に対し、以前と同じような生活を送れるように支援を行う専門職です。私の仕事は機能訓練、自宅環境を想定したトイレ動作や更衣訓練などのADL訓練のほか、家事動作訓練や趣味活動の再開、復職などの環境調整を行っています。退院後に家事や趣味活動が再開できた患者様からの「またできて嬉しい」という言葉が、やりがいに繋がります。これからも患者様が希望している退院後の生活を実現できるように支援していきたいです。

Alumni Report

▶ 本学で学んだことは、現在の仕事にどのように活かされていますか?

身体の構造や作業療法士の基本的な知識・技術を得たことはもちろんですが、連携基礎ゼミなどで他学科の学生と様々な専門職の視点からアプローチしていくことについても学びました。他職種を理解し、連携していくことの大切さを学生時代に学んだことで、現場での他職種との情報共有や、患者様にとって最良の支援を行うことができています。

▶ これから作業療法士を目指す高校生や在学生へメッセージをお願いします。

作業療法士は何でも屋だと思っています。機能訓練を行い、ADL訓練や家事動作訓練・趣味活動の再開、患者様によっては復職までの支援を行っていきます。そのため様々な知識が必要になり、苦労することもありますが、患者様の生きがいとなる作業を再開できた時は達成感があり、一番やりがいのある仕事だと思います。大学では作業療法士の基本的な知識を学ぶと共に色々な経験をしていきながら作業療法士を目指してください。

卒業生レポート FileNo 02

自分の仕事に責任を持つ

厚生連高岡病院
診療情報管理士
田村 梨紗さん
富山県 南砺福野高校出身
医療情報管理学科
2017年3月卒業

▶ 現在の仕事内容を教えてください。

私は病院にとって大事な収益である保険請求業務を行っています。正しい請求書を決められた時間内に作成することは、簡単そうにみえて実はとても難しいことです。医療スタッフが行った診療行為を無駄にすることなく、お金という形に変えて正しい請求書を作成できた時は達成感があります。2年目でまだまだ失敗も多く、先輩方に助けていただいているので、少しでも早く一人前の社会人になれるように、色々なことを経験し吸収していきたいと思います。ある先輩に教えていただいた「挨拶・笑顔・感謝」というキーワードを忘れずに、日々業務に励んでいきたいです。

Alumni Report

▶ 本学で学んだことは、現在の仕事にどのように活かされていますか?

病院とはとても特殊な組織です。様々な職種の方がいますし仕事内容も全く異なり専門性が高いです。私は4年間で学んだ医療知識はもちろん、他学科と一緒に講義を受けられたことで、視野も広がり自分の学びにプラスになりました。自分の視点のみならず、色々な職種の視点を持つことは大切だと思います。

▶ 本学を一言で表すとしたら何になりますか?

「輪」です。それぞれ違う職種を目指す学生と友だちになり、お互いの情報を交換し合える環境があることが、結果的に「輪」になって病院を支える人材育成になっているのではないかと思います。講義やサークルなど、色々な活動を通じてたくさんの仲間に出会えました。

▶ これから医療事務職関係の仕事を目指す高校生や在学生へメッセージをお願いします。

大学生活は思っているよりあっという間です！資格取得など勉強に力を入れるときはしっかり頑張り、遊ぶときは思いっきり楽しみ、たくさんの仲間を作ってください。皆さんが楽しい大学生活を送れるように陰ながら応援しています!

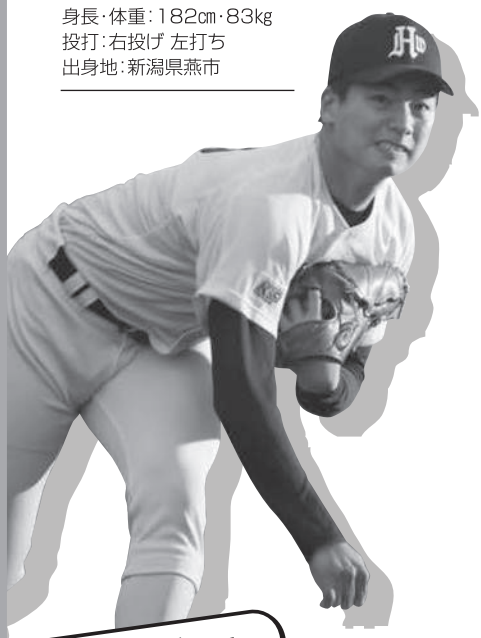
旬なニュースをお届け！

CAMPUS NEWS

2018年 プロ野球ドラフト会議にて 漆原大晟選手がオリックス・バファローズより育成1位指名！

PROFILE

漆原 大晟 投手
生年月日：1996年9月10日
身長・体重：182cm・83kg
投打：右投げ 左打ち
出身地：新潟県燕市



＼本学から2人目となるプロ野球選手が誕生！／

10月25日(木)に開催された2018年プロ野球ドラフト会議にて、本学硬式野球部の漆原大晟選手（健康スポーツ学科4年・新潟明訓高校出身）がオリックス・バファローズより育成1位で指名されました。漆原選手のプロ入りにより、硬式野球部創部6年目にして、2人目となるプロ野球選手が誕生しました。指名を受けた後、記者会見が行われ、漆原選手は指名された喜びやオリックス・バファローズ入団に向けての意気込みを述べました。その後、部員たちにより漆原選手の胴上げが行われ、佐藤和也監督や部員たちと喜びを分かち合っていました。今後とも、硬式野球部へのご支援をよろしくお願い致します。

interview

――指名を受けたときの感想と今後の意気込みを教えてください。

自分を評価していただき、指名していただいたことはとても光栄に思います。育成からのスタートとなりますが、一日でも早く支配下登録、一軍登板を目指し、日々精進していく所存です。課題が多くありますので、周りの選手から良いものを吸収し、レベルアップを目指し、皆様から応援していただけるような選手になりたいです！

ありがとうございました。今後も新潟医療福祉大学一同、漆原選手を応援しています！

視機能科学科

『目の愛護デー』に保育園で目の講習を開催！

10月10日(水)の『目の愛護デー』に合わせて、新潟市東区のはじめ保育園で、紙芝居による「目の講習」を開催しました。この紙芝居は、視機能科学科1期生が作成した話で、視機能科学科の学生らが読み聞かせを通じて子供たちに“目の大切さ”を伝える活動を行っています。

参加した学生の感想　視機能科学科2年　**吉田 拓斗**

目の健康について紙芝居の読み聞かせによる講習に子どもたちが真剣に聞き入ってくれました。子どもたちの反応も良く、読み聞かせは大成功でした。1期生が作ってくれた紙芝居を使った講習を「劇団視機能」の活動として長く続けていきたいと思いました。

医療情報管理学科

第44回日本診療情報管理学会学術大会で金賞・特別賞を受賞！

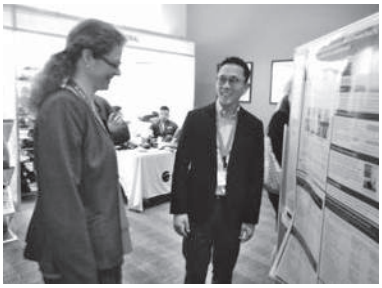
9月20日(木)・21日(金)に開催された「第44回日本診療情報管理学会学術大会」において、医療情報管理学科4年生の演題が表彰を受けました。この学会は全国の認定校の学生が集う、年に一度の大イベントです。

医療情報管理学科の学生・教員からも多数の研究成果の発表が行われました。学生セッションでは55演題の口頭発表が行われ、その中で医療情報管理学科の4年生が金賞と特別賞を受賞しました。

義肢装具自立支援学科

学生4名が足と靴の国際学会にて学術発表を行いました

2018年9月21日～22日、オーストラリアのアデレード市で行われたInternational Foot and Health Symposium 2018／Annual Symposium of Pedorthic association of Australiaにおいて、義肢装具自立支援学科の阿部薫教授が指導する学部生1名、大学院生3名が学会発表を行いました。同学会には世界中から足と靴の研究者が集まる権威のある学会です。日頃の研究活動の成果をまとめて発表し、会場からは研究レベルも高く評価され、質疑応答に対してもスムーズに受け答えしました。日頃の地道な学術活動においても、本学の取り組みが国際レベルの学会で評価されたことに、関係者一同、大変嬉しく思っております。本学では今後も学術・研究活動を積極的に支援していきます。



健康栄養学科

地元飲食店で学生考案の健菜メニュー販売！

株式会社キタカタとアルビレックスランニングクラブ、新潟医療福祉大学の連携健康企画の一環として、健康栄養学科3・4年生がキタカタグループのお店のメニュー考案を行いました。

企業・プロスポーツ団体・大学が、「メニュー開発」「健康増進・地域貢献」「教育・研究」それぞれの視点から連携を図った今回の取組みは、全国的にも実施例が少なく、またこうした取組みにより、新潟の“元気”と“健康”に寄与できるものと考えております。

「私立大学研究ブランディング事業」報告

文部科学省 平成29年度「私立大学研究ブランディング事業」選定

リハビリテーション科学とスポーツ科学の融合による先端的研究拠点

—Sports&Health for All in Niigata—

新潟QOLサポートコンソーシアム 活動報告！

SHAINプロジェクト※1では、本学が有する教育・研究資源を最大限に活用し、学童・高齢者・障がい者などのすべての人々のQOL向上を支援する「新潟QOLサポートコンソーシアム」を組織し、様々な健康増進活動・スポーツ活動を実践しています。

10月21日(日)「小学生・パラアスリート合同陸上教室」開催！

特別ゲストに3大会連続パラ五輪出場中の中西 麻耶 選手(うちのう整形外科)と本学卒業生で100m・200m日本ランキング第5位(2018.9.4現在)の前山 美優 選手(新潟アルビレックスRC)をお招きし、陸上教室を開催しました。当日は、ゲストによる実演や指導が行われたほか、本学で運動指導者や義肢装具士を目指す学生もサポーター役として参加しました。

このように東京五輪・パラ五輪を目指すトップ選手が共に集い、交流できる機会は全国的にも数少なく、参加者はもちろん、学生にとっても学ぶことの多い一日になりました。

10月28日(日)スペシャルオリンピックス日本(SO日本)※2連携事業「新潟ヘルシーアスリートプログラム」を開催！

本学では、知的障がい者の健康維持増進などを目的に“SO日本”との連携による地域活動を行っています。今回のプログラムでは、知的障がいのある方を対象に、複数学科の教員・学生による「健康相談会」を実施し、筋力、体組成、栄養、バイタルサインなどの評価・測定を行いました。

また学生は、健康相談を通して、対象者の抱える悩みや問題に触れることで、“より良い支援”について考える機会となり、実践教育の場としても貴重な経験をつむことができました。

※2 知的障がいのある人たちにオリンピック競技種目に準じた様々なスポーツトレーニングと成果発表の場である競技会を提供する国際的なスポーツ組織。

※1 文部科学省 平成29年度 私立大学研究ブランディング事業の選定プロジェクトの通称。リハビリテーション科学とスポーツ科学の融合により、“Sports & Health for All in Niigata(SHAIN)=地域住民からアスリートまで全ての人が安全にスポーツを楽しみ、幸せな生涯を過ごす新潟県”の創出を目指します。

伍桃祭を終えて

第18回伍桃祭(大学祭)開催報告

今年の伍桃祭は、「千紫万紅」というテーマで開催しました。「千紫万紅」というテーマには、“千を超す学生の華が秋空の下、色彩豊かに咲き誇る伍桃祭”という強い願いを込めました。当日は、台風25号などの影響により一時は開催も危ぶまれましたが、実行委員を始め、ステージでのパフォーマンスや模擬店を出店した学生団体の皆さん、協賛企業様、外部企業様、事務局の方々などのご協力のもとで、伍桃祭を無事開催することができました。

初日は、「消防女子」と新潟活性化Men'sユニット「NIE'S」のトーク&ライブやインディーズバンド「シルエ」によるライブを開催し、多くの方にご来場いただきました。模擬店の出店を行ってくれた学生団体の皆さんには、前日に台風に伴う会場変更があったにもかかわらず、柔軟に対応していただきました。また、2日目には、シンガーソングライターの「erica」さんと「井上苑子」さんによるライブショーを開催し、大いに盛り上がりました。

台風への安全策を講じることで、両日共に無事に開催することができ、約3,200名の来場者の方々を笑顔にすることができたことに、私たち実行委員が準備してきたことは無駄ではなかったのだ、と安堵しています。

しかし、出し物を一部中止しなくてはならなかった点や、体育館以外でのステージ、出店場所、協賛金の使用方法、パンフレットの配布方法、広報活動など、まだまだ改善できる箇所も多く見つかりました。この点をしっかりと引き継ぎ、年度を重ねるごとに研鑽されることを願います。

最後になりますが、無事に伍桃祭を終えることができたのも、地域の方々や御協賛いただきました企業様をはじめ、教職員の方々や参加してくれた学生の皆さんのおかげです。そして、企画・運営してくれた学友会・伍桃祭実行員に感謝します。本当にありがとうございました。

第18回伍桃祭実行委員長兼学友会副会長　北畠 祐人

高校生のみなさんへ

春のオープンキャンパス 2019年 3月23日(土)

バスツアー運行予定!

新3・2年生に向けての「大学・入試説明」を行うほか、複数の学科の仕事や学びを体験できる「全13学科による体験プログラム」や「学生寮見学」「個別相談」など様々なプログラムをご用意しています。また、「将来何になったら良いか分からない」が「夢が見つかった!」や、「進学先が見つからないが」が「志望校が決まった!」など、進路意識が変わる瞬間に出会えるチャンスです。また、新潟県内外の各都市より無料の日帰りバスツアーも計画しています。どうぞお気軽にご参加ください。

一般入試・センター試験利用入試ご案内

■一般入試日程

日程	出願期間	試験日
前期	12/24(月)～1/17(木)［消印有効］	2/6(水) 2/7(木)
後期	2/8(金)～2/25(月)［消印有効］	3/6(水)

■センター試験利用入試日程

日程	出願期間	試験日
前期	12/24(月)～1/25(金)［消印有効］	本学独自の個別学力検査等は課さない
後期※	2/8(金)～2/25(月)［消印有効］	

※作業療法学科・健康栄養学科を除く11学科にて実施

■一般入試のポイント

- **前期日程は2日間の試験日を設定。両日受験することで合格のチャンスが拡大!**
  - ⇨「第2志願制度」の活用で最大4学科まで出願可能!
  - ⇨ 両日共に同一学科に出願した場合、高得点の試験日の点数を採用!
- **前期日程では、全学科で最大4年間の授業料が全額免除になる特待生を選抜!**
- **「第2志願制度」の活用により、一度の出願で第2希望の学科まで志願可能。**
  ※「理学療法学科」「臨床技術学科」「診療放射線学科」「看護学科」を第2志願とすることはできません
- **前期日程では全国8都市、後期日程では全国6都市に試験会場を設置。**
  (前期日程:新潟・東京・郡山・高崎・長野・富山・鶴岡・仙台)
  (後期日程:新潟・東京・郡山・長野・鶴岡・仙台)

■センター試験利用入試のポイント

- **センター試験を受験し、自己採点を終えた後でも出願可能!**
- **選択科目は高得点科目を自動的に採用!**
  ※地理歴史・公民および理科②は、第1解答科目の得点を採用します
- **「複数学科への出願」や「一般入試との併願」で合格率UP!**

インターネット出願

インターネット出願では、

1出願につき3,000円割引!

新潟医療福祉大学

〒950-3198　新潟市北区島見町1398番地
TEL 025-257-4455㈹　FAX 025-257-4456
URL　https://www.nuhw.ac.jp/
スマートフォンサイト　http://www.nuhw.ac.jp/sp/
【入試事務室】TEL 025-257-4459
E-mail　nyuusi@nuhw.ac.jp

誌名「QOLサポーター新潟」の由来

世界一の長寿国となった我が国では、「いのちの長さ」を伸ばすことと同様に、「生活の質、Quality of Life, QOL」を豊かにすることが、益々重要になっています。新潟医療福祉大学では障害者、高齢者などのQOLを高くすることを支援する(サポート)人材を育成します。このような人材を「QOLサポーター」と名づけました。そして皆様に本学の内容、活動をお知らせする広報誌を「QOLサポーター新潟」としました。